

風土記の丘の花だより³³³

今、そしてこれから見られる植物(2026年8月8日)

ついに3が3つ並ぶ号まで到達しました。何かひとつの記念すべき通過点みたいで嬉しいですね。これもひとえに読者の皆様の励ましのおかげです。これからも植物の魅力を皆様に届けるために、どこまで続くかわかりませんが、気力体力の続く限り書き続けます。



園内のあちらこちらでタカサゴユリの白い花がたくさん咲いています。年々その数を増やしている気がします。それは風土記の丘にかぎりません。車でどこを走っても見かけると言っても過言ではありません。このユリは台湾原産の帰化植物です。タカサゴは「高砂国」のことで、日本では昔、台湾のことをそう呼んでいたことに由来します。繁殖力が強く、種子から1年で開花し、高速道路の分離帯などの劣悪な環境にも順応し、急速に分布を広げています。



この2つは多くの人にとって余り喜ばれない、いわゆる「雑草」の代表のような草です。左がメヒシバ、右の太い方がオヒシバです。ヒシバとは「日芝」のことで、日向に生える芝という意味です。メは小さいとか弱いなどという意味の接頭語、オは同じく大きい、強いということを意味します。たしかに、日陰には生えず、かんかん照りの乾いた土に群生します。花だよりでは、こんな草でも紹介します。花びらが鮮やかな派手な草も、こんな地味な草も、みんな生きています。



日向の乾いた地面にペタ〜と張り付くように生え広がるこの草も厄介者扱いされていることでしょう。名前はアレチニシキソウです。何と言っても「荒れ地」ですものね。ちぎると断面から白い汁が出ます、でも案外引き抜きやすい柔らかくて弱々しい雑草です。葉の真ん中に赤っぽい斑紋があるものはコニシキソウという別の種類です。上のメヒシバ、オヒシバ同様、ほとんどの人が目にもとめない、気にもとめない草ですが、この炎天下、花を咲かせ、実を結び、一生懸命生きています。たまにはじっくり眺めてやりませんか？



最後は花らしい花にします。ヨメナです。漢字で書くと「嫁菜」です。どうしてこの漢字を充てたかは諸説あるようです。万葉の昔から摘んで食べていたらしく、歌にも詠まれています。「春日野に煙立つ見ゆおとめらし 春野のうはぎ摘みて煮らしも」うはぎとは、ヨメナの昔の呼び名です。薄紫色の可憐な花です。

松下